

# 市史編さんたより



(28)

## 北川の水質

我々は、3年前の平成5年1月17日(日)に9項目に及ぶ内容の水質調査を北山小学校前の北川でおこなった。このうち、特に必要と思われる二つのデータについてまず解説を試みる。

**COD**(科学的酸素要求量)有機物による水質汚濁の度合いを示し、CODの値が大きい程、汚濁がひどいことを意味する。非常に清潔な水1%、水道水としての限界3%、魚類の生息にとっても好ましい値5%以下、不快感を生じない限度8%とされる。要するに清浄な河川のCODはふつう5%以下のものを指すと考えてよい。

これに対して北川の水質は、朝(午前9時)が最も良質で昼前後に悪化(高い値)を示している。いづれにせよ、10・4、16・5という高い値から水質はあまりよいとはいえない状態であった。

**SS**(浮遊物質)は懸濁物質ともいわれ、水中に浮遊して溶解しない物質の総称で、水の汚濁状況を示す重要な指標の一つである。河川水にSSが多くなると光の透過を妨げ、自浄作用を阻害し、魚類のえら呼吸を困難にする。見た目の汚れと最も近い相関を示す、できるだけ汚濁程度は低い方が好ましい。

雨による土砂の流入もなければ、工場排水の流入もなかったにもかかわらず、9時~11時までの間に13~67%にはねあがった。これを反映して午前11時頃から河川水が白濁しはじめた。白濁の原因は、日曜日の久し振りの晴天で、洗濯用洗剤を含む家庭排水が大量に流入したものと考えられた。ピークの11時を過ぎるとまた値は急速に下がっていった。

こうした状況を踏まえて平成8年1月13日(土)正午頃、我々は再び北川を訪れた。晴天続きと流域一体における都市下水の整備完了のためか、水量は過去に比較して若干少ないが水質はかなり好転している様子が見とれた。北山小学校前の大堰上手の濃みの白濁も消え、川底の水藻が見えていた。大堰下の水泡も少なくなかった。魚影こそ見えなかったが、カワセミが餌を捕食する姿も見られた。北川にも親水施設がそろそろ似合う日も近いようである。

自然担当 新井鎮久